

『おとなしい女』*の対位法

佐野健治

1

いわゆる幼な妻に死なれた四十一歳の質屋男が一夜死体を前にして自分の「考えを一点に集中」しようと努めている。主人公は妻とのかかわりの出発点にさかのぼって相互間に起こったすべての出来事を点検していく。

入質人として現れた女主人公の最初の印象は、「十四くらいにしか見えない、若いな、といった感じ。ところが、彼女はあと三カ月で十六であった。」この時点で女は男にとって特別の対象ではなく、いわば個体である。短い間に彼にとって人格的な対象に転じた彼女を、男は「こころだての優しい、おとなしい女 *Ona dobra i krotka.*」と感じる。これが題名の由来である。

彼はおとなしい女と結婚し、ごく短期間に二人の間柄はすべての展開を終え、いま彼は起こったことの総決算を行っている。作者ドストエフスキーにとって、主人公を描くとは、確固たる人物像を描くことではなく、自己意識の総決算である。すなわち主人公の自分自身と自分の世界についての最後の言葉を求めていく。この自己意識の総決算を行う方法は、対位法による。ドストエフスキーにおいては対立矛盾を抜きにして主導の主人公のいかなる行為も、思想も現れてこない**。以下はその対位法の主な断面を取り出そうとする試みである。

題名の語彙の意味から始める。

題名の『おとなしい女』Krotkaja (krotkij) という語は、SLOVAR' RUSSKOGO JAZYKA: AKADEMIJA NAUK SSSR INSTITUT RUSSKOGO JAZYKA, 1982 という辞典によると、その第一義は Nezlobivij であり、動詞 zlovit' から派生している。すなわち、日本語に置き換えると、悪感情を抱かせる、憎悪させる、怒らせるという意味の動詞から派生した形容詞を否定形にしたものである。言うまでもなく、zlo〔悪〕が語幹である。この語釈では、悪を否定すること、悪のアンチテーゼという意義が、首座におかれていることが目につく。

この Nezlobivij の項にはまた、類義語として nezlovnyj〔悪意のない、害心のない、敵意をもたない、意地の悪くない、毒々しくない〕が挙げられている。

同辞典の語釈は、さらにつぎの二つの意義を示している。

ustupchivij パラフレーズすれば、すぐ譲歩する、卑下する、謙遜な、従順な。

pokornyj 同じく、(1) 従順な、恭順な。(2) 忍従する、無抵抗の。

ドストエフスキーと同時代の VRADIMIR DAL': TOLKOVYJ SLOVAR', 1882 では、krotkij はつぎのような含意の群れをもつ。

O CHELOV. TIKHIJ〔人物について〕(1) 静かな、穏やかな。(2) おとなしい、柔和な。

SKROMNYJ (1) 控え目の、謙遜な、遠慮深い。(2) 質素な、つつましい。

SMIRENNYJ 謙遜な、温順な、柔和な。

LJUBJASHCHIJ (1)→動詞 LJUBIT' 愛する。(2) 愛情の深い；(特に VZGLJAD 目付きについて) 愛情のこもった、優しい。

SNISKHADITEL'NYJ (1) 寛容な、寛大な。(2) 寛容らしくて横柄な。

NE VSPYL'CHIVYJ 短気でない、怒り易くない。

NEGNEVLIVYJ 怒り易くない、短気でない。

MNOGOTERPELIVYJ 辛抱強い、我慢強い。

作者が、おとなしい女 *krotkaja* という語をこの作品のタイトルにしたのは、以上の辞書の語釈に示されたような一連の含意が、女主人公の性格に内包されることを、読者に示唆したものと考えることができる。

しかし問題はそれだけでなく、おとなしい女という語をタイトルに掲げることによって、その反対の意味への往復通路が同時に開かれるという、ドストエフスキー独自の対位法についても考えなければならない。

実際、語釈の反対物である、悪 *zlo* の概念が女主人公の行為と *morale* 的水準において照合するような事柄を小説から拾ってみると、つぎのような犯罪的行為とキリスト教徒としての冒瀆行為が挙げられる。

- (1) 先祖伝来の聖母像の入質
- (2) 将校エフィーモヴィチとの密会
- (3) 夫の射殺未遂
- (4) 聖母像を抱いて自殺

この、悪という意味の水平に限らず、上の語釈に並べられたような、他の多くの特性を表す一連の意味から照らし返して見るときも、「おとなしい女」という語は、これらのさまざまな反対語との対位的関係〔言葉の広い意味でのアンチノミー〕に立つ。それは同時に、実体の表象としてそれらの反対語と相互浸透を重ねる関係〔正反合〕にもある。そうした複合的な含意をもつ語として、「おとなしい女」は使われている。

女主人公が、気位の高い、貧困に屈しない、物を越えた観念世界を理解する人間であると見ることは、読者にとって異存ないことだ。さりとして彼女は男主人公のレプリカには程遠い。彼女は屈辱への報復をピストルによって果たそうとするなど、男主人公の特性のアンチテーゼを増幅した形で担わされた。そして形象としての人間臭を欠落させた。

『おとなしい女』は、ドストエフスキーの他の作品にもまして、観念の図式を展示することに終始するような作品だが、それにもかかわらず、形象としてもなお読者の関心を外らさないだけの内容をもって追って来る。その働きかけは作品の芸事の内容によるというよりはむしろ、論理的思考のしなやかさと緩急自在による。その思想的な構想に見えるものは、テーゼとアンチテーゼ相互間の対位法への作者の関心である。

2

ここで第一章の筋立て（梗概）を取り出してみよう。

(1) 女主人公は困窮の極限にあった。男主人公は女を、事実、「醜悪な状態から引き出してやった。」彼は解放者の意識を内心もつが、そのふりはしない。こうした対等でない者の間の贈与行為〔貸付金の水増し〕に結婚がからむ。女はどこへも行き場がないが、さりとてこの男が唯一の選択ではない。

男主人公は「最上の甘い熱情」*presladostrastnaja mysl'* に浸り、四十一歳 vs 十六歳というアンバランスに極度の甘さを感じる *ochen' sladostno*。ドストエフスキー的としか言いようがない対位法である。

(2) 結婚当初、女は「愛をもってとびついてきた。」毎晩夢中で夫を迎え、「恍惚たらしめるような罪悪を含まない子供言葉で」*ocharovatel'nym leptom nevinnosti* 身の上話をした〔1-3〕。彼女の自分への愛について男主人公は確信を抱き、女は愛する者の悪徳すら崇めるものだとは彼は考える。

しかしそのように夢中になる彼女に対して男主人公がとった態度は、これに水をかけ、沈黙をもって答えることだった。

実はそれが男主人公の企画であり、企画は一つのシステムをつくらせている。女にとって男は一個の謎となる。ドストエフスキーの謎の問題である。

考えていることを口に出して言うのは、恐ろしく愚劣であるし、恥ずかしいことだと彼は思う。

この一見プロメテウスのなテーゼが一方で彼を思想的に支えている（崩れるまで）。

(3) 男にはロシアの将校社会から「侮辱に満ちた沈黙をもって排斥された」という恨みと、再起問題がある。入質人として現れた女主人公が初めて言う言葉は、「社会に復讐していらっしゃるのね」であった。

排斥されたのは、男主人公が決闘を拒否し、連隊の将校らがこれに臆病者という宣告を下したことに端を発した。「私のあんたらに対する熱烈な衝動に対して、あんたらは私の生涯にわたる侮辱で答えた。」そもそも男主人公は些細な事件にひっかけて決闘することを示唆された。これに対して、彼は、自ら侮辱を感じていないのに応じる訳にいかないと答えた。「横暴に反対の行動をとっていっさいの結果を甘んじて受けることが、決闘よりはるかに勇気を示すことになるんだと考えた。」彼は連隊を追われて、質屋を開業する。そしていま、女主人公から銃口を向けられる羽目に陥った。彼はそれに耐えてみせることによって、自己主張を貫徹し、女主人公に「勝利する。」それによって自己に向けられた侮辱をぬぐい去ったと考える。

再起のために選んだ金貸し稼業についても、男主人公にはコンプレックスがついて回る。(質屋通いはドストエフスキー自身にも生涯ついて回ったが)。「若い連中は金を軽蔑する」という観念が男主人公の頭に主旋律として奏でられている。彼らは寛大で衝動的、忍耐力がなく、金に軽蔑を抱く。そのような寛大さ *velikodushie* は生活の苦勞もなく得られたものだから、なんの値打もない、と。こういった金観念に対するアンチテーゼが男主人公の金に対する姿勢である。それは当時興隆期にあったロシア資本主義への人びとの通念の一つであったかもしれない。彼は「生涯にわたる侮辱」への報復

として、三万ルーブリ達成の企画を立てる。「三万ルーブリでクリミアにぶどう園を得て、一生を全うする権利がある」と彼は自分に向かって、また誰か分からない人に向かって黙って叫ぶ（妻には告げない）。その実行のためには、金貸し稼業を肯定するようなアンチテーゼを成立させなければならない。業務には「厳格に」取り組まねばならない。これに対して女主人公は「たちのよくない微笑」を浮かべて批判者として立ち現れる。しかし彼女が「決闘後」病床に伏したのち、男主人公は徐々に折れて出るようになる。

(4) 男主人公は叫ぶ（本文からの抜粋）。

私を裁くなら事情を聞いてくれ [1-3]。

地上の真実とはなんと恐ろしいものか。

あの魅力的なおとなしい女、あの青空のような女、あれが暴君だったとは。

私が愛していなかったと誰が言えるのか。

運命と自然の意地の悪いアイロニーがそこに生じたのだ。

人間の生活は呪われている、おのれの生活はとくに呪われている。

私はいまになって、そこに、何ごとか私に間違いがあったことが分かる。

何かしらそこに食い違いがあったのだ。

以上が第一章の梗概である。

3

第一章 1 (1-1) は「いかなる人間で私はあったのか、いかなる人間で彼女はあったのか」 Kto byl ja i kto byla ona といういささか大仰なタイトル

がついている。これは過去形の問いであり、したがってのちの転換が示唆されている。

男主人公の特性は孤独、不適応性。ドストエフスキーは、主人公を根深いヒポコンドリー症の患者と言っている。彼は自分について「私は黙って語る名人だ、私は生涯黙って話してきたし、自分一人で黙っているんな悲劇を生きてきた」と言う〔1-3〕。要するに過剰な自問自答が彼の特徴である。

男のもう一つの特性は、高度の西欧的教育を受けた人間として、自己の知的判断と考えるところを他に譲歩しないことである（決闘の判断と質店稼業、生活企画と他者への黙秘）。両方の結果として、彼は社会からも、おとなしい女からも排除される。

作者はこの作品の形式が空想的であることを強調している。すなわち女主人公にかかわる経緯が、細大漏らさず、その全期間について、テーブルに乗せた女を前にして、リアルタイムで語られるという形式が空想的だというのである。しかし空想的なものは形式に限られない。延々と繰り広げられる自問自答自体もまた、主人公自身にもなぜか分からずにその内容が空想的なのである。

「いかなる人間で私はあったのか」という問いに対して、あたかも歴史的、記録的実体を忠実になぞっていくかのように、男は過去の出来事を彼なりに叙述する。しかし実は、これは主人公男の観念の推移を綴ったものである。文中には、女の直接話法の形をとった発言もわずかながら見られるが、もし死んだ女が同様の企てをしたなら、どこかで重なりあいながらもまったく別のストーリーができただろう。

作者の提出した作品のテーマ、すなわち思想的課題はつぎのようなものである。

「彼はすこしずつ実際に問題を自分に明らかにしていって，“思想を一点に集中”していく。彼によって呼び起こされた一連の思い出が、ついに彼を否

応なく真実へ〔k pravde〕と導いてくる。そして真実は必然的に彼の知恵〔um〕とところ〔serdtse〕を高めていく。終わりに近づくにしたがって、物語の調子までが無秩序な冒頭と比較して変わってくる。真理〔istina〕は不幸な男の眼前にかなりはっきり、決定的に展開されるのだ、少なくとも彼にとっては。」

このテーマの具体的内容を取り出してみよう。

1-1のタイトル「どのような人間で彼はあったか」という問い。

これに対する質屋男自身の答えは、悪魔メフィストフェレスの自己紹介の言葉を借りている。ゲーテの戯曲『ファウスト』において、ファウストが「……では君は何者だ」と問うのに対してメフィストフェレスは、

「常に悪を欲して、しかも常に善を成す、あの力の一部分です」Ein teil von jener Kraft, Die stets das Böse will und stets das Gute schafft. と答える。

メフィストフェレスは「常に否定するところの霊」を自称して、人間が罪だとか破壊だとか呼んでいるものの本領であるという。彼はさらに正確を期して言い直す。「人間という馬鹿げた小宇宙は、通常自分を全体だと思いこんでいますがね、私は、初めは一切であったところの部分の、そのまた部分です。光を生んだ闇やみの一部分なんです。高慢ちきな光は、今や母なる闇を相手に、古い地位と空間を争っていますが、うまくいきやしません。どんなにもがいたって、光は物体にくっついたまま離れないからです。光は物体から流れ出て、物体を美しく見えますが、しかし物体は光の進路をさえぎるんです。だからたぶん遠からずして光は、物体と共に滅びるでしょうよ。」

(相良守峯訳)

『おとなしい女』において質屋男の言葉はこうである。

「私はね、悪をなすことを欲して、しかも善を創り出す、全体の、かの部

分の一部分なんです。」Ja...ja esm' chast' toj chasti tserogo, kotoraja khochet delat' zlo, a tvorit dobro...

この「全体の、かの部分の一部分」という、質屋男の言葉は、上に引いた、メフィストフェレスが自己をより正確に規定し直した言葉に倣っている。「私は、初めは一切であったところの部分の、そのまた部分です。光を生んだ闇の一部分」なのだという。これは闇こそが宇宙の源泉であり、その闇がいまなお主座であるという主張である。創世記に由来するこの視点からメフィストフェレスは光を見下げる。自らを主張するためには対立物を超克することが必要である。

質屋男は闇がおのれのテーゼであるかのように、メフィストフェレスを気取って引用した。それは、半ばメフィストフェレスが乗り移ったつもり自分と、質屋稼業を嫌悪している自分の心情を女に伝えたいがために、この言葉をシニカルな口調で援用したという面と、両面があるだろう。

『ファウスト』のメフィストフェレスなる闇の霊は定言命令に従うのみであり、彼にとってファウストの「二つの魂」は不可解である。この悪魔は、常に否定するところの霊という自己の本領から一步も踏み出すことはない。彼が人間を見る目は絶対的である***。

これに対置するものとして、ドストエフスキーはそこから「闇対光制度」と仮称できるような体系を別に構想した。そこにおいては、闇の中に内包される「凡庸」なる概念が、まったく論理的脈絡を離れたアンチテーゼとして出現したはずである。それは実体としての母なる闇、大地であり、凡庸である。対照される光とは当時の西欧合理主義（本文中の J.S. ミルのような）だろう。

それが、女主人公のあの最後の言葉に動揺して男が到達するアンチテーゼである。男はいじめの世界の敗退者である。彼は西欧的知性制度からの脱退者でもあり、のちにそれに対して反逆を始める。半ば偽悪的に自問自答を執拗に続ける男は、実はメフィストフェレスの真似事をするだけの精神力を自

らに備えていない。このことを、年若い妻の死から思い知らされることになるが、やり直そうにも遅かった。というより、やり直すことは本来できない。

それでも男は切り抜けていく。彼はロシア社会の旧習が自ずから行為に現れ出たような形で妻の足元の土に接吻し、拝跪する。それは物語の外面的な筋立てである。彼はこの衝撃から自己を「理解する」契機を掴んだ。

幼な妻は、若さと、人真似であると男から言われるところの寛大さを最大限に駆使して、難物男に対処しようとしただろう。しかし彼女には「理解」は無理だったのか。それは書かれていない。ただ「理解していない」人間から発せられる「理解した」ふりをする態度というものについて、男主人公が不信と不快感をつのらせる様子は重ねて強調されている。いわゆる確信的なるものに対して疑惑の目を向ける世界である。それが両者の間に挟まれている。

4

男主人公は、女主人公が男の旧知の将校と密会するのを盗聴して帰宅、夜、報復のためにピストルをこめかみに押しつけてきた女との「決闘に勝利」する。結婚は解消され、彼女は「打ち負かされたが、許されなかった。」

男はこの勝利から満足を得た。それは、つぎのことが達成されたと思ったことによる。

(1) 過去の、男を臆病者と宣告した将校世界での屈辱に対して、彼一流の決闘の論理を貫徹させることによって、完全に復讐した。

(2) 唯一の親友と彼が勝手に決めた女主人公が、危うく敵に加担するかに見えたが、その危機にさいして自分が臆病者ではないことを彼女に証明することができた。

(3) 打ち負かされ、卑しめられ、押しひしがれた彼女に、彼は「悩ましい

までに憐憫を感じることはあった。」にもかかわらず、「彼女が卑しめられたという観念 *ideja ob ee unizhenii*, このようにわれわれの間が対等ではないという観念 *ideja etogo neravenstova nashego* が気に入った。」

女は男の意識によって、自分の意欲のすべてを剝奪され、六週間の病床につく。

ところがこの間に、彼にとって女主人公は、逆転して、空想の中の未来の希望のすべてに転じていくのである。男は貧しい女に質草無しに金を与えたり、債務を許したりし始める。しかし彼女に対しては、彼は勝ち誇っていて、勝ったという意識だけで少なくとも当初は十分満足であった。

春、男主人公の目隠しをしていた垂れ幕が落ちた。それが知性を盲目にしていることを、彼は気づかなかった。医師が診察にきて帰ったあと、病気ではない女主人公は「私はまったく、まったく健康です」と言って急に顔を赤くした。男主人公はその、顔を赤らめたことを、おとなしい *krotkij* という語の一つの含意である従順、謙虚 *smirenje* という性質のせいにしてしまった。それは羞恥であるには違いないが、すでに離婚状態になっている男が、いまなお夫 *nastojashchij muzh* であるかのように「彼女を気遣うことが彼女にとって恥ずかしかったのだ」と、男は言う。そして思い違いに気づかなかったのは、覆い布、垂れ幕 *pelena* のせいであった、と [2-2]。

「その幕が突然ぱたりと落ちて、私は急に目が開き、いっさいを理解した。それは偶然だったのか、あるいはそうした時期が到来したのか、それとも太陽の光線が私のにぶった知性の中に、思考と推察の火を点じてくれたのか？ いや、そこには思考も推察もなかった。」 [2-1]

この型のドストエフスキーの主人公〔ドミートリ、ラスコーリニコフ〕は知的な推論によってアンチテーゼに行き着くよりは、むしろ、自ずからそこに感じられたものとして行き先がふと生じるのである。「不意に一つの血管が、死に瀕していた血管が、震えだして生き返り、鈍くなっていた私の魂

と、私の悪魔的な慢心を照らしたしたのである。私はそのとき、急に飛び上らんばかりだった。」

傲慢の夢から覚めかけたとはいえ、なお男主人公は空想の世界を漂っていることに変わりはない。覚醒のきっかけを彼に与えるのは、「歌そのものまで病気しているような」女主人公の小声で歌う歌であった。「それは恐ろしい、奇妙な、病的な、ほとんど復讐的 *mstitel' noe* ともいべき驚きであった。」男主人公は自分がいるところで女が歌を歌ったことに感激する。そこから彼の「歓喜」*vostorg* が誘発され、悲劇的なフィナーレへ向かう。

まさにこのアンチテーゼの取り出し方が、ドストエフスキー的な対位法に他ならない。メフィストフェレスを気取っていた質屋男は、異なる水平に属する闇に、凡庸の世界というものに、つまり普通の人間世界に、目が開くというのである。「そこには思考も推察もなかった」という状態をいかに導入し、生命を鼓吹するかということに、小説の成否はかかっている。

物語としての見せ場は、この女の歌と、男の激情が開放されるくだりである。とはいえ、空想に耽る人間が勝手な思い入れから虚脱した女性に強引に迫っていくというのは、目をそむけたくなる喜劇と言うより他ない。彼はロシアの伝統に従って地面（床）に接吻する。女の口から無意識に「あなたが私をそのまま放っておいて頂けるものとばかり思っていましたのに」という文字通り「最後の言葉」が洩れる。女は生きていく望みをまったく失ったと告げたのである。一方、男にとってその言葉は「いっさいを説明した」。男はここからつぎの段階（ブローニュへ）を上っていき、ルケーリヤに向かって「あすはまったく別なことが始まるのだ」と言う。

覆いが一枚取れたことによって不幸な男の目に凡庸の世界が見えだしたことが、読者にとっての筋立てである。彼がその中で生きるのは、この先の長い行程である。それより前に女は去る。その底辺に「運命と自然の意地の悪いアイロニー」が横たわる。

作者の内意としての原理的テーマは、短編の形式上、大展開を見せている

と言えない。しかし、「いま彼は(1) 自分自身に話しかけているかと思うと、今度はまた(2) 目に見えない聴き手や、(3) なにか裁判官のようなものに話しかける」(まえがき)という作者の問題の領域設定から考え直すと、もっと大きなテーマを論じたものと見るべきなのかも知れない。

生活のあるところには、侮辱と報復、愛憎、善悪、高慢と臆病、傲慢と凡庸、全と無というような二項対立の相互間、あるいは斜横断の対位法は果てしなく続く。すなわち *pro et contra* [二律背反=同等の権利をもって主張されるテーゼとアンチテーゼの決闘] は、限りなく続くのである。ここでは、おとなしい女 *krotkaja* という、小説の題に選ばれた語そのものが、それらのテーゼとアンチテーゼの複雑な組合せを体現し、躍動し続ける。

5

……私だって彼女が担いで行かれねばならぬくらい、分かっているさ。私は気が違っていないし、今はうわごとを言っているのじゃ決してない。逆だ。こんなに知性が輝いていたことは、これまでになかったのだ。だが、またもや家に誰もいなくなる、またもや二つの部屋、またもや私一人と質物だけ。うわごと、うわごと、あれはうわごとだった。彼女を、私が苦しめたのは——それなんだ。

質屋男は自分もまたその束縛の中にいた西欧的知性の枠を破って、その外へ出ようとする。彼のもっとも自負するものの一つであった、教育のある男の殻を割って出る。彼は裁判官に向かって叫ぶ。「おれに言うことを聞かせるような力が、いま、おまえのどこにあると言うんだ？ なんのために、闇の凡庸が、何にもまして高貴なものを打ち砕いてしまったのだ？ おまえたちの法などいまの私にとって何になるか？ おれはおまえたちから絶縁するぞ。」

いもしない裁判官へ向かって真っ向から言い返すことが、いまや彼の、死んだ妻への、愛の言葉である〔まあ破れかぶれだが〕。女はその男の言葉を受け入れるための余地を、男によってすべて押しつぶされた状態に追い込まれて、死んだのだった。そしてその女は男の亜流でもある〔新しい傾向〕。女に希望を抱かせていたものは、女の若さであった。「うわごと、うわごと、あれはうわごとだった。彼女を、私が苦しめたのは——それなんだ。」女は男に先行して反乱した、男に対して。悲劇は時間〔主観〕のずれである。

男は闇の中に内包される凡庸 *mrachnaja kosnost'* の原初に思いを致す。それはロシアの闇である。それは目の前に、死人となって横たわっている。遅蒔きながら彼は叫ぶ。こうして男の一人芝居は悲劇であり、かつヴォードヴィルである。

合唱席から作者ドストエフスキーが進みでて、彼の師ゴーゴリに習って、幕切れの歌を一節、独唱してみせる……

〔人間の〕凡庸さ！ それが自然なのさ！ 地上の人間たちはばらばら、これが不幸なんだ！ 「この野に生き残った者はいないのか？」と、かつてロシア勇士は叫んだ。勇士ではないが、私も叫ぶ。ところが誰も答えない。太陽は万物に生命を与えるそうだね。太陽が上ったら、見なさい、太陽は死んでいるじゃないか。何もかも死んでいる、いたるところ死人ばかりだ。たまに人がばらばら、だが、そこには沈黙があるだけだ。地上とはこんなもんだ。「人びとよ、互いに愛し合いなさい。」誰がこんなことを言いました？ 誰の遺訓でしょう、これは？……

Kosnost'! O, priroda! Ljudi na Zemle odni — vot beda! «Est' li v pole zhiv chelovek?» — krichit russkij bogatyr'. Krichu i ja, ne bogatyr', i nikto ne otkrikaetsja. Govorjat, sorntse zhivit vseleenuju. Vzo-

jdet sortse i — posmotrite na nego, razve ono ne mertvets? Vse mertvo, i vsyudu mertvetsy.

Odni tol'ko lyudi, a krugom nikh molchanie — vot zemlya! «Ljudi, lyubite drug druga» — kto eto skazal? chej eto zavet?

〔注〕

- * F. M. DOSTOEVSKIJ POLNOE SOBRANIE SOCHNENIJ V TRIDTSATI TOMAX TOM DVADTSAT' CHETVERTYJ, DNEVNIK PISATELJA ZA 1876 GOD, NOJABR'-DEKABR' 『ドストエフスキイ後期短編集』米川正夫訳、福武文庫
- ** M. BAKHTIN, PROBLEMY POETIKI DOSTOEVSKOGO, MOSKVA, 1963
M. バフチン『ドストエフスキー論』新谷敬三郎訳、冬樹社
- *** JA. E. GOLOSOVKER, DOSTOEVSKIJ I KANT, MOSKVA, 1963
ゴロンフケル『ドストエフスキーとカント』木下豊房訳、みすず書房